どうなる?! 女子大学

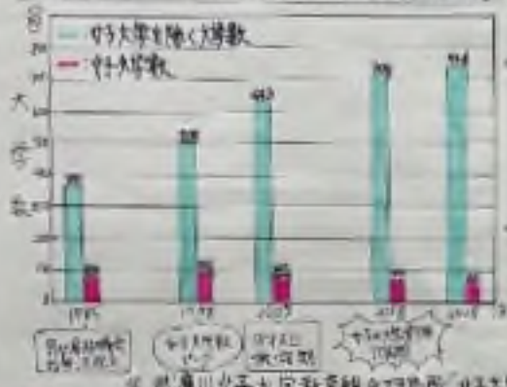
～統計から読み解く現代女子のニーズと進路選択～

Q なぜ今、女子大学は減少しているのか？

近年、テレビや新聞で、女子大学の共学化や閉校のニュースを度々目にする。現在、女子大学の7割以上が定員割れしているといわれている。女子の大学進学率は高まり続けているのに、なぜ女子大学でそのようなことが起きているのか、統計から女子のニーズと進路選択の変化を読み解いていきたい。

【1】女子大学減・大学増の「ねじれ」／18才人口減・進学率増の「矛盾」

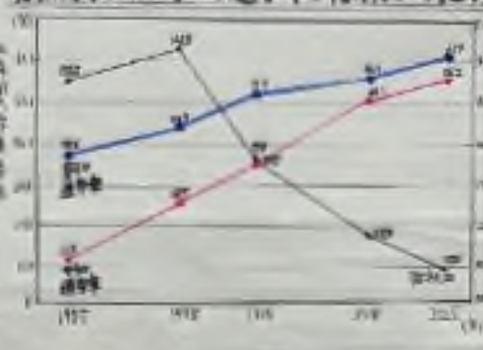
大学数（短大）と女子大学数の推移



対象年の選定理由：
日本の大学市場と女子進学の歴史に沿った転換期を網羅するため、1985年、1998年、2015年、2018年、2025年（予測情報）を抽出した。

大学数（女子大学除く）は増え続けている。4年制で約1.3倍増。
女子大学は1998年を境に減少。ピーク時の開校から四半世紀で約3割減。

男女別4年制大学への進学率と18才人口の推移

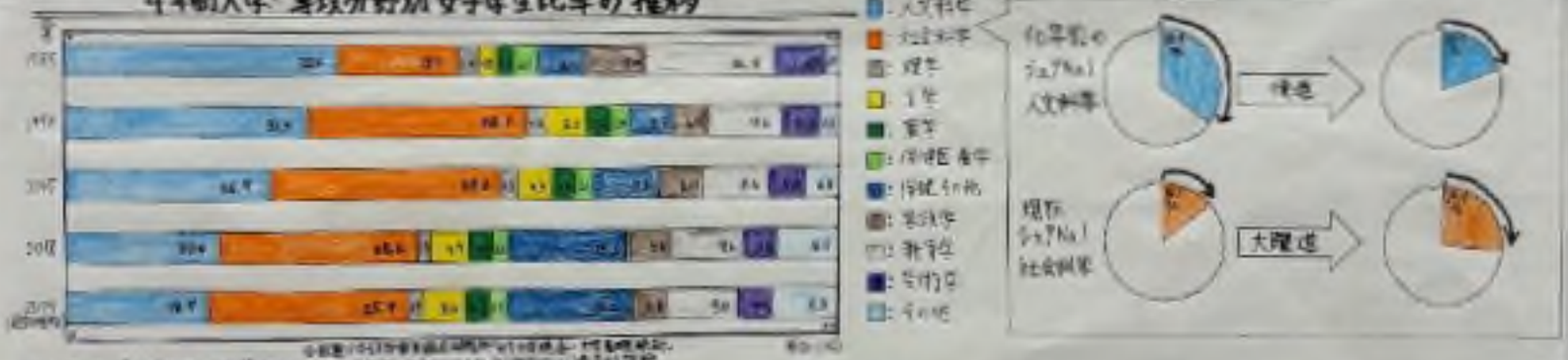


女子の4年制大学進学率は伸び続けており、過去最高水準となっている。男子の4年制大学進学率に迫る勢いである。
18才人口は2005年から減少の一途をたどっている。
大学は増えているため、女子を含む学生の進路の選択肢が豊富になってきている。

※武庫川女子大学教育総合研究所「女子大学統計・大学基礎統計」（http://yoken.mukogawa-w.ac.jp/stat/）のデータをもとに作成。

【2】女子の進路選択の変化 ―選ばれる学部とは？―

4年制大学 専攻分野別 女子学生比率の推移



<女子に選ばれている学部>

- **社会科学**：1998年は3位程度だったが、現在2倍近く増え、トップシェアを誇る。総合職やマーケティング職などで就職に直結する知識を習得できるためと考えられる。
- **保健衛生**：シェア2位。景気に左右されず、結婚や出産、転居などのライフイベント後も就職に困らない資格、技術を習得できるためと考えられる。
- **理学・工学**：全体における割合はまだ低いが、IT業界の人手不足や理系女子の求人ニーズが急激に高まっていることから学部も女子比率が上がると考えられる。

<女子に選ばれにくくなっている学部>

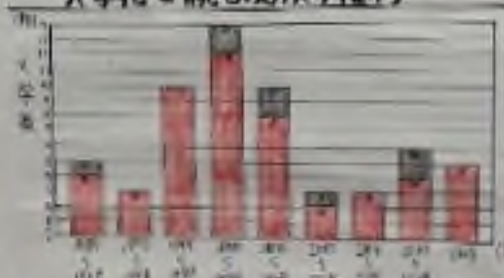
- **人文科学**：女子学生のシェアが半減している。就職に結びつきにくく、転職する学生が増えていると考えられる。
- **家政学**：雇用機会均等法の浸透、一般職から総合職へのシフトなど、現代社会のニーズに合致しにくくなっており、他の学問を選ぶ傾向が高まっていることが考えられる。
  （注）管理栄養士などを目指せる栄養学の学科は一定の人気を保っている。

⇨女子学生は、男子と同様に総合職や専門職を目指す学部選択で、キャリアに直結する学部選びが加速している。その変化が、伝統的に文学や家政学メインだった女子大学の定員割れや減少につながっていると考えられる。

【3】女子大学の未来 ― 各大学が下している決断 ―

決断1：共学化／決断2：統合廃校

共学化と統合廃校の推移



2018年代前後は1年間に多くの学校に動きがみられた激変期であった。
直近の2025年単年だけでも複数の学校に動きがあり、少子化の波がいっそう厳しくなってきたこと、入試志向の高まりがうかがえる。

決断3：女子大学維持

- 白梅学園大学　2025年7月「女子大学宣言」
  → 年内入試で志願者大幅増。
- 神奈川工学園大学　2021年5月「女子教育宣言」
  → 東海地区唯一の工学系総合女子大学としてのポジション確立に前向きな反響を広く受けている。

※武庫川女子大学教育総合研究所「女子大学統計・大学基礎統計」（http://yoken.mukogawa-w.ac.jp/stat/）のデータをもとに作成。

A どうなる?! 女子大学

・時代の変化とともに選択されない女子大学が増えてきたことは確かである。しかし、それでも女子教育に特化し続ける大学は独自の強みを生かし生き残るだろう。そのため二極化はさらに進むとみられる。

・女子大学の減少は現代の女子学生が自らの学びたい環境（共学か女子大か）を自由に選択し、多様なキャリアを主体的に選択できるようになった証といえる。